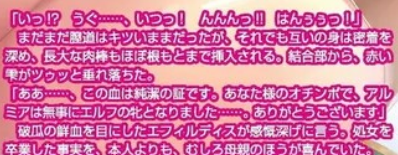
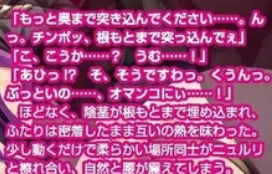
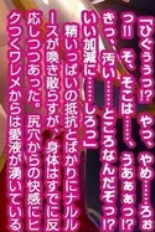


監 布施はるか

監 huracan

監 ルネ

巨乳マフィア娘催眠



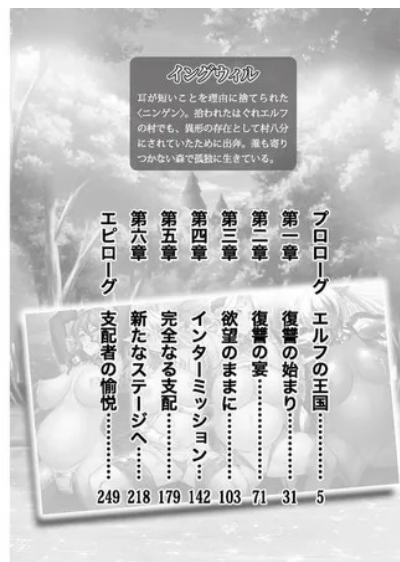


「その言葉だけで光栄です。ありがとうございます。」
 「本当に愛おしいわね。いいわ。とにかく先に説明しておきましょうか」
 エイルデイスは頑固な守護騎士へ柔和に微笑み、言葉を続けた。
 「ここは、王族と、一部のハイエルフしか知らない（聖なる地）森の精気が清らかな水に宿り、私達に魔力をもたらす、御を施してくれる場所よ。アルミアも成長して、私からこの聖なる地への場所を伝えられること、とても嬉しく思います」
 ひとり娘のアルミアが「はい」と意気込む。
 高貴な王族であるここに誇りを持つハイエルフの地、アルミア・アグラーリエル。名臣の賢れ高い母を継ぐ者としての重圧からか自他ともに厳しく、時には（生意気）とか（王族の傲慢さ）と受け取られてしまう部分もある。また、母とは違って魔法よりも剣に興味を持ち、守護騎士アルミアに師事していた。それ故、幼い頃からナールリスを姉のように慕いつつも王女として振る舞う、素直で生真面目な娘でもあった。
 ナールリスも、自分の立場をわきまなければならぬと自覚しつつ、アルミアを妹のように大事に想っている。エイルデイスが「家族のようなもの」と口にしたのも道理だろう。
 エイルデイスは、なおも言う。
 「ナールリス、あなた達ハイエルフにも、この泉のことを知ってほしかった。ようやく望みが叶いました。これからは、この地を知る者として一緒に過ごしてほしいのです」
 「大変光栄です。エイルデイス様のお慈悲が、わたし達ハイエルフに道を示してくだ

「ええ、ありがとうございます。ナルは、とても気がつくわね」
 「ありがとうございます。ナルリス、わたしは、大丈夫です」
 騎士の名を冠しに愛称で呼ぶ女王と対照的に、姫はどこか気負った印象だ。
 「これも騎士の務めですから」
 職務に忠実な褐色肌の女騎士は、ダークエルフのナールリス・イルンヘン。近衛隊長にして、女王と王女の守護騎士である。ダークエルフは、魔力こそハイエルフに劣るものの、代わりにエルフ族としては思えた筋力と体力を持ち、身体能力に優れている。かつてはハイエルフと対立していたが、今は関係が改善され、互いの証として多くのダークエルフが近衛の任を承えられている。ナールリスは、その頂点に立つ騎士だ。
 そして、ナールリスが守護する女王と王女が、今、彼女の目の前にいるふたりだった。
 「アルミアもナルも、ここへ来るのは初めてだったかしらね」女王エイルデイス・アグラーリエルである。不治の病で急逝した先代の娘として、数百年前、女王の座へと就いて以降、王国をより豊かに繁栄させた人物だ。ハイエルフとダークエルフの争いを収め、ナールリスを近衛隊長としたのも彼女であった。エイルデイス本人は、そういった功績を鼻にかけることなく、民のための治世を行い、名君として慕われている。
 「このような神聖な場所」二緒さしていただくこと、とてもたいなく思います」
 「もう……。その堅苦しさだけは玉に瑕ね。私達にも、家族のようなものなのよに……」

四方を険しい山脈に囲まれ、深く広大な森にいたれた「アグラーリエル王国」。
 そこは、現女王エイルデイスをきめ、代々女性のハイエルフによって統治されているエルフの国である。魔力の強さと純度で指図定められたハイエルフ達が行う施政は、周辺国への影響も大きく、世界の中心地のひとつと言っても過言ではない。
 とはいえ、アグラーリエルは（伝説の土地）でもあった。
 なぜなら王国は、厳格な純血主義のもと、険しい山脈や深く広大な森と境界との相乗効果によって、外部の者……すなわち異種族の侵入を拒んできたからだ。交易と交流は厳しく管理され、王国内に足を踏み入れることのできる異種族は皆無に等しい。にもかかわらず、周辺国へ影響を及ぼすため（伝説の王国）と呼ばれているのである。
 加えて、エルフ族が不老不死ともいえるほど長命種なことも理由のひとつである。
 そんなアグラーリエル王国の深部にある森のなか、清らかな水が湧く泉の畔に、三人のエルフの姿があった。
 「女王陛下、お手をどうぞ。姫様も、足もとにお気を付けてください」
 軽装アーミーを着けた褐色肌の女騎士が、高貴な装束の女性ふたりへ手を差し伸べる。

フロローク エルフの王国



フロローク

話を知りてを理山に捨てられた
(エンジン)。抱かれたはぐれエルフ
の村でも、異色の存在として扱八分
にされていたために出発。誰も寄り
つかない森で孤独に生きている。

フロローク エルフの王国
第二章 復讐の始まり……
第二章 復讐の宴……
第三章 欲望のまに……
第四章 インターミッション……
第五章 完全なる支配……
第六章 新たなステージへ……
エピソード 支配者の愉悦……

249 218 179 142 103 71 31 5

「さいました。わたしの命に替えなくても、聖なる氣を満る所存です」
 「フフ。そこまで気負うことはないわさ、それじゃあ本浴びをしましょうか」
 エフィルデイスが全裸になつて泉へ入ると、アルミアも微づつた。
 「そ、その……お邪魔……します」
 「両腕で胸を隠して背を向ける娘の髪を、エフィルデイスは優しく掻いてやる」
 「フフ。そんなに緊張しないで、誰かが来る心配もないから、楽にいいのよ？」
 「それは……わかつていますけど、でも、やっぱり少し、恥ずかしいです……」
 「あら、どうして？」
 泉のなかほだまで水に浸かつたエフィルデイスが小首を傾げた。その拍子に、胸開
 106センチの豊満な乳房がタプと揺れる。
 「一方、胸開9センチの娘は、わずかに頬を決めて俯いてしまう」
 「うう……。あ、あまり裸を見せるのは……慣れてませんので……」
 「恥ぢらうアルミアは、胸170を超えている、とはいえ、長命のエルフ族では、まだま
 だ少女ともいえる年齢である。アルミアの大きな胸も、未だ成長途中。いずれは母親のよ
 うにたわな肉房となるだろう」
 「本当に、立派に育ってくれたわね。肌艶もとってもきれ細かくて、とても綺麗よ」
 「そんなこと……。お母様に比べたら、わたしなんて全然……」



「何を言ってるの、あなたがそんな謙遜をしてたら溺れかねるわ、ねえ、ナル？」
 いきなり話を振られたナルミスは「クス……」と微笑んだ。
 「はい。姫様のお身体、本当に美しいです」
 「ナ、ナルミスまで……。あう……」
 テレで、ますます顔を赤くするアルミア。そのまま泉の中へ沈んでしまいうに俯く娘
 を見て、エフィルデイスは話題を変えた。
 「ねえ、ナルも一緒にどうかしら？ とつても気持ちいいわよ」
 「いえ、わたしはおふたりをお護りする任務がありますから、畏れ多いことです」
 「あ……。でも、誰も来ないのなら、少しくらいは……」
 素の性情をのぞかせたアルミアも促すが、ナルミスは小さく首を横に振る。
 「万が一ということもありますから……。お許しください」
 「そう……」
 酷く残念そうなるアルミアの様子にナルミスが胸を痛めていることは、傍目にもわかつ
 た。エフィルデイスは、ふたりに助け舟を出す。
 「そうね……。今度は、二人で一緒に入れる機会を作りましょう」
 「そ、そんな……。わざわざ、そんなことをしていただくなくても……」
 「あまり遠慮されるのも寂しいものよ？ アルミアも、あなたを慕っているのだから」
 「は、はい。それは、その……。とても嬉しく……」

「言いかけるナルミスが、不意にハッとして背後を振り返った」
 「ナルミス……。どうかした？」
 「心配がします……。何かさわめきが……」
 表情を引き締めたナルミスは、目耳を澄まして周囲を警戒する。エルフ族の特徴であ
 る長い耳が、ピクピクと動いた。腰の後ろに下げた長剣の柄に、油断なく手を伸ばす。
 「その時だった。ワールフに似た、頭の因獣が咆哮とともに茂みから飛びだしてくる」
 「いけなかつ、獣が!! お下がりでください!! 姫様っ!! エフィルデイス様っ!!」
 「きやあつ!!」
 驚きの悲鳴をあげるアルミアめがけて突進する凶獣。ナルミスは、素早く抜いた剣を
 振る。凶獣の行く手を阻んだ。
 「はあっ! ふんっ! やりやあつ!!」
 一般のエルフ族と比べて筋力と体力に勝るダークエルフだが、他種族との比較で最大の
 特徴となるのは俊敏さである。流れのような、それこそ舞いを踊るかのような優雅な動
 きで、凶獣の急所を的確に捉え、仕留める。
 「ナルミスッ!!」
 剣の鋒である守護騎士の見事な立ちまわり、それを目の当たりにして我に返ったアルミ
 アが、自らも戦おうと、急いで岸へ上がりとうとする。
 「大丈夫です。姫様、おケガは？」

「わ、わたしは大丈夫……、ひっ!!」
再びアルミアが短く悲鳴をあげた。ナルルースの肩越しに、新たな凶獣の姿が見えたのだ。それも、「頭や」頭ではない。

「新し……!!、まだ増えていくのか?」

「アルミア、逃げなさい!!」

「エフィルデイスが鋭く叫ぶ。」

「でもっ、お母様……!!」

「くう……!!、逃げなさい、早く!!」

襲ってくる凶獣の爪と牙を剣で防ぎ、ナルルースも叫ぶ。

やむなくアルミアは、眼を身に着けると、手にする余裕もなく、泉の畔を走りだした。凶獣が飛びだしてきたのは別方向の森の中へと、手にする余裕もなく、泉の畔を走りだした。凶獣が飛びだしてきたのは別方向の森の中へと、手にする余裕もなく、泉の畔を走りだした。

ナルルースが剣で、エフィルデイスが魔法で、凶獣と相対しているあいだに、アルミアは森の奥へと駆けつけた。だがしかし、背後に追手の気配を感じる。チクリと振り返れば、一頭の凶獣が迫っている。幸い、相手は傷を負っているらしく、簡単に追いつかれそうにはなかったが、それでも徐々に距離が詰まっていた。

アルミアの手に武器はない。剣を握ってはいいても、普段から持ち歩いているわけではなかった。エルフ族が得意とする弓にしても、同じだ。まして、彼女は全裸なのである。

「わ、わたしは大丈夫……、ひっ!!」
再びアルミアが短く悲鳴をあげた。ナルルースの肩越しに、新たな凶獣の姿が見えたのだ。それも、「頭や」頭ではない。
「新し……!!、まだ増えていくのか?」
「アルミア、逃げなさい!!」
「エフィルデイスが鋭く叫ぶ。」
「でもっ、お母様……!!」
「くう……!!、逃げなさい、早く!!」
襲ってくる凶獣の爪と牙を剣で防ぎ、ナルルースも叫ぶ。
やむなくアルミアは、眼を身に着けると、手にする余裕もなく、泉の畔を走りだした。凶獣が飛びだしてきたのは別方向の森の中へと、手にする余裕もなく、泉の畔を走りだした。凶獣が飛びだしてきたのは別方向の森の中へと、手にする余裕もなく、泉の畔を走りだした。

ならば、魔法を、母であるエフィルデイスには遠く及ばないが、ハイエルフであるアルミアも魔法は使える。仕留めることは無理かもしれないが、手負いの凶獣を無力化することくらいはできるだろう。
アルミアは急ブレーキをかけて、迫りくる凶獣と対峙しようとした。ところが、慌てていたせいで、うっかり足を滑らせてしまう。
「きやあああああああ……!!」
ステテンと転んで尻餅をついた際に、凶獣が跳躍した。アルミアの数メートル前に着地して、勝ち誇ったように咆哮をあげる。鋭い爪と牙が、木漏れ陽に輝く光った。
「ひ……!!」
息を呑んだアルミアの顔が恐怖に引き曇る。もはや魔法を使うところではなかった。目を走らせ、歯を剥きだしにして咆哮をあげる凶獣が、グッと姿勢を低くする。再度跳躍し、襲いかかろうというのだ。
次の瞬間、飛びかかろうとする凶獣の前に立ち塞がる背中がアルミアの瞳に映り込む。
「危ないっ!! はあああ……!!」
エルフ族からすれば低く太い声とともに、アルミアの前に立つ人物が手にした斧を振り下ろした。ちょうど飛びかかっていた凶獣の肩間に、斧の刃が深くと喰い込む。耳障りな断末魔の絶叫をあげ、凶獣の体が地面にドスンと落ちた。ビクビクとのたうちまわる動きも徐々に弱々しくなり、やがてすっかり事切れる。

それを確認してから、アルミアの窮地を救った人物は凶獣の肩間から斧を引き抜き、向きなおった。ボロボロのマントをまとったその人物の顔は、被っているフードに隠れてよくは見えない。
「大丈夫だったか?」
そう問われても、アルミアは目を丸くしたまま呆然としていた。
「それにしても……、こんな森の奥に、これほど美しい娘がいるとは……」
軽く腰を屈めた人物は、ハイエルフの怒の顔をまじまじと覗き込み、ほどなくして思いだしたように斧を手に持ち替え、そっと白手を差し伸べてくる。
「……っ」と、それより、立てるか? もしかして、水浴びの時にでも洗われたのか?」
アルミアの顔が急に赤くなり、全身にジワリと汗が吹きだした。
「あ……、は……んっ、ああ……、あ、ふ……、あ……」
「な、なんだ……? お、おい……、大丈夫か?」
心配そうな声をかけ、その人物がアルミアの手を握む。
「きやあ……!!」
途端に、弾かれたように手を振りほどいて引つ込めたアルミアが、自らの身を掻きいだくように蹲った。
「あ……、あつ!!、い……、嫌っ!!」
見ず知らずの者の前で、無防備かつ無様に裸身をさらしていた。そのことに、ようやくく

気がついたのだ。アグラリエル王国の姫として、名君エフィルデイスの娘として、まったくの機嫌である。一方、アルミアの胸の内を知る由もない相手は、わけがわからないといった様子で茫然と立ち尽くしていた。
そこへ、「姫様……!!」と声が傾く。
「姫様……!!」
マントの人物が振り向いた先に、息を切らせて駆けつけてくるダークエルフの姿があった。ナルルースである。
「あつ!!、キヤマッ、姫様に何をしたあつ!!」
蹲って責めるアルミアを目にするなり、ナルルースは血相を変えて剣を構えた。
ナルルースは見向きもしない。それはど別に血を弄らせているのだ。
マントの人物が、慌てて飛び退いた。
「うわっ!!、ま、待てっ!!、俺は何もしていないっ!!」
「姫様の、そのご様子を見るに、よくも抜け抜けと言えたものだな!」
「遠うっ!!、俺が何かしたわけじゃないっ!!、手を貸そうとしたら、彼女が急に……」
「言い訳は聞かん!!、はあつ!!」
まったく聞く耳を持たず、激昂したナルルースはマントの人物に斬りかかる。相手が手にしていた斧が、寸でこのところを剣を受け止めた。

それを確認してから、アルミアの窮地を救った人物は凶獣の肩間から斧を引き抜き、向きなおった。ボロボロのマントをまとったその人物の顔は、被っているフードに隠れてよくは見えない。
「大丈夫だったか?」
そう問われても、アルミアは目を丸くしたまま呆然としていた。
「それにしても……、こんな森の奥に、これほど美しい娘がいるとは……」
軽く腰を屈めた人物は、ハイエルフの怒の顔をまじまじと覗き込み、ほどなくして思いだしたように斧を手に持ち替え、そっと白手を差し伸べてくる。
「……っ」と、それより、立てるか? もしかして、水浴びの時にでも洗われたのか?」
アルミアの顔が急に赤くなり、全身にジワリと汗が吹きだした。
「あ……、は……んっ、ああ……、あ、ふ……、あ……」
「な、なんだ……? お、おい……、大丈夫か?」
心配そうな声をかけ、その人物がアルミアの手を握む。
「きやあ……!!」
途端に、弾かれたように手を振りほどいて引つ込めたアルミアが、自らの身を掻きいだくように蹲った。
「あ……、あつ!!、い……、嫌っ!!」
見ず知らずの者の前で、無防備かつ無様に裸身をさらしていた。そのことに、ようやくく

「キサマのような者が総様に触れるなど……」 国祇を差し向けたのも、キサマかつ!!
 「なっ!! なんの話を……!!」
 間うておいて、答えを聞こうともしないナルルースの剣戟が続けざまに繰りだされる。手心など微塵もない明確な殺意の籠る刃が、容赦なく振り下ろされた。その猛攻が、マンナの人物の手から斧を弾き飛ばす。

「うわっ!!」

「終わりだっ!!」

間髪を容れず、ナルルースの渾身の一撃が振り下ろされた。

イングウィルは、エルフとしては数少ない(男)としてこの世に生を受けた。

貴重な性である(男)の誕生は王国を管理するハイエルフの高官達を喜ばせ、生まれた男子は皆、市井には出されずに、神聖な森の奥の神廟で手厚く保護されることとなる。イングウィルも、当然その恩恵を受けるはずだった。

しかし、実際は違っていた。
 イングウィルは、赤子の時からほかのエルフの男子とはどこか違っていた。まず、生まれた時から自然に纏わっているべき魔力が、ほとんどなかった。さらには、歳を重ねるごとに、ほかのエルフの子よりも早く成長し、体つきもゴツゴツと強くなったものになっていた。そして何より、生まれつきのものだったが、エルフの特徴である耳がずっと短い。

まだだった。こうした体の差異を、高官達は当然のように、よしとしなかった。

長命種として知られるエルフは、誰彼かまわず自由に子孫を残せるわけではない。古より厳格に管理された種族繁殖の掟があった。身体が成熟して子を授かることができる期間になった女性エルフは、ハイエルフ、一般のコモンエルフ、あるいはダイクエルフにかかわらず、広大な神廟施設のなかにある《生命の祠》と呼ばれる場所へ赴くことになる。そこでハイエルフの高官が管理する儀式が行われ、祈りによって降りた神から新たな生命を授かることされる。

儀式は神聖なものとして、その実態を知る者は一部のハイエルフしかいない。だから、ほかの種族が行う繁殖のための《交尾》は、猥褻するものであり、エルフが行うことではない。と広く一般に信じられていた。ふだりに肌を触れ合うことはもちろん、快楽を求めた交尾は、非常に穢らわしい禁忌のものとされてきた。故に、種族繁殖の厳格な掟と相俟つて、多くのエルフ達は《男性》の存在自体を知らない。それはつまり、己れの持つ本来の性分……種の保存にかかわる本能に気づいていないということでもあった。

幼いイングウィルは、自分が貴重な《男》であることもよく知られぬまま、異端たる《耳なしの忌み子》として、森の外へと捨てられた。それは王国からの放逐であり、繁殖の掟を守るために死刑を科せられたに等しい。

運よくイングウィルは、はぐれエルフに拾われ、その集落で育てられることとなった。けれど、そんな幸運も長くは続かなかった。しばらく歳月を重ねると、イングウィルはま

すまず成長し、エルフの時間感覚としては、それこそあつという間に、集落の大人の背丈を追い越してしまった。

そんな所、村の長老達が《耳なしの忌み子》の噂を口にし始める。イングウィルは《猥褻さ》などではないか、そして、《猥褻さ》を村に置いては災いが起こるのではないかと、幼い頃であればともかく、体の大きくなったイングウィルが嫌いだ。ある意味《凶悪》な雰囲気を感じることだった。

底づける者もいないわけではなかったが、いつまでもこのううというられるほど、イングウィルは鈍くも固太くもなかつた。結局、追われるように村を去り、王国民がほとんど誰も寄りつかない《深き森》と呼ばれる場所へ移るようになった。

ひとり生きていくなかで、イングウィルは少しずつ自身のことを理解していく。物心ついてからエルフ族の女性しか見たことのないイングウィルは、耳だけでなく体つきも村のエルフ達とは違うことを悟った。声の調子もずっと低く、顔の雰囲気も異なる。それは確かに、《猥》が持つ特徴を感じさせた。

森に住む獣達は、牡と牝に性別が分かっている。イングウィルの特徴は、猥の牡が持つそれと合致していた。とはいえ村のエルフ達は、エルフの牡……すなわち男性の存在を知らない。猥は交尾をして子孫を産み残すが、エルフは祈りの儀式によって産まれるとされ、それを信じていた。だからこそイングウィルを《猥逆さ》と恐れたのである。

いずれにしろイングウィルは《耳なし》である自分は出来損ないのエルフなのだと思え

るようになっていった。なぜ自分だけがそうなのか、答えてくれる者がいるはずもなく、自らの体を呪いながら孤独な日々を過ごしていた。

イングウィルがハイエルフの姫君と遭遇したのは、そんな時だった。そして、誤解からダイクエルフの渾身の一撃を喰らってしまった。

体に冷たい感覚が疾り抜け、しだいに薄れていく意識のなか、イングウィルは強く思った。幼くしてハイエルフに捨てられ、はぐれエルフの村で自らを追われ、それでもなんとか生きてきた。誰の邪魔をするでもなく、ひとりじつと耐えてきた。そんな自分が、たまたま他人を助けようとしただけに、殺される。こんな理不尽がありえるのか、と、嫌だ。死にたくない……このまま死んで壊るか……!!

「う……わ……」

心臓が破裂し、体内から熱い血潮が噴き出したような感覚に、イングウィルはハッと眼を開ける。ぼやけた視界の中に、とんがかり帽子を被ったエルフの顔が見えた。

「よかつた、気がつかれましたか……」もう少し寝ていてください、まだ傷が癒がりがきつていませんから」

「傷……うっ、く……」 あんたは……? 「こは……、どこだ?」

いつの間にか寝にされていたイングウィルの身を優しく摩り、エルフが微笑む。

「あら、ご挨拶がまだで失礼しました。わたしは、魔女のディネリンドと申します」

ディネリンドを名乗るエルフは自ら《魔女》と称したが、王国においてはの《魔女》とは道

を踏み外した魔導師への魔術である。わざわざ自分から口にすることは、自虐的とも思える名乗りだったが、イングウィルも似たような立場だけに、敵えてそのことに触れはしなかった。

「ここは、わたしの住処ですわ。薬草の採取に森へ行ったのですが、そこで偶然あなたの方のことを見つけて……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

なっている。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」



力を増幅させる効果があるのです。それでは……失礼いたします」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「フン……。嬉しい？ ダークエルフじゃあるまいし……」

「いえいえ、この強い骨格……。ダークエルフとも比べ物になりません。あなたは、素晴らしい（ニンゲン）ですよ」

「ニヤリと笑みを浮かべるディネリンド。イングウィルは思わず問い質した。

「あなた、ニンゲン？」

「もちろん、あなたのことですわ。あなたは、ご自身のことをエルフの出来損ないだと、そう思っているのですね。でも、違います。あなたは耳の短いエルフなのではなく、本来（ニンゲン）と呼ばれる種族なのです。この世界は、エルフだけのものではありません。姿形は似ていても、本質の異なる種族が存在します。ニンゲンの男も、そうです」

「待って……今（オオコ）と、言ったか？」

「その単語は、イングウィルも幼い頃にハイエルフの神官から聞かされた記憶が、うつすらと残っている。もともと、それ以降は一度も耳にしたことがなかった。

「はい、そう申し上げます。あなたはニンゲンの（男）……。間違いないですね」

ディネリンド……。初めて会ったばかりの、このエルフは、イングウィル自身すら知らない彼のことを、いろいろと知っているようだ。いったい、彼女は何者なのか？

イングウィルには訊きたいことはかりである。とはいえ、まず先に口を開いて出たのは、先刻来ずっと気になっていたことだった。

「ところで……。さっきから何をしているんだ？」